

埋文よこはま 19



財団法人 横浜市ふるさと歴史財団 埋蔵文化財センター 平成21年3月18日発行

縄文時代前期の貝塚 ひらだいかいづか — 平台貝塚の調査 —

◆縄文海進と貝塚

最後の氷河期が終わり、急激に気候が暖かくなっていった日本列島は、今から約6,500～5,500年前に温暖化のピークを迎えました。

この間、海面は年平均1～2cm上昇し、最盛期には現在の海面より数メートル高かったことがわかっています。この急激な海面の上昇を縄文海進と呼び、その最盛期は縄文時代前期にあたります。

この時期、鶴見川流域では都筑区佐江戸町・川向町・大瀬町付近まで入り江となっており、貝の良好な生息

地であったようで、沿岸の台地上には多くの貝塚が形成されました。港北区の高田貝塚・下組東貝塚・菊名貝塚や、都筑区西ノ谷貝塚・南堀貝塚・茅ヶ崎貝塚・北川貝塚、緑区の笹山貝塚など、鶴見川の流域を中心に多くの貝塚が

確認されています。

貝塚とは、昔の人々が、中身を取ったあとの貝殻を同じ場所に捨てた結果できたものです。貝塚からは貝殻のほかにもいろいろなものが発見されます。土器や石器のほか、魚やイルカ・クジラ、イノシシやシカなどの動物の骨や歯・牙など

もみつかっています。そして、それらを材料として作られた道具や装飾品も発見されます。中には、埋葬された人の骨もみつかります。貝塚は、当時のごみ捨て場と呼ばれますが、その時代の自然環境や生活の様子など、貴重な情報が詰まった遺跡なのです。

◆平台貝塚の過去の調査

平台貝塚は、JR根岸線山手駅の南東約0.7km、中区本牧

緑ヶ丘の県立横浜緑ヶ丘高校の南側付近に所在する、縄文時代前期の貝塚です。この貝塚は、竈門（真門）貝塚とも呼ばれ、約70年前に発表された「神奈川県下貝塚調査概報」(酒詰仲男『人類学雑誌』)にはすでに報告されており、古くからよく知られている貝塚のひとつです。

昭和37年(1962)に同校のグランド拡張工

事が行なわれた際、当時在学していた岡野隆男氏は出土した遺物を採集し、卒業後の昭和41年(1966)には小規模な発掘調査を行ない、縄文土器や石器などの出土品について



貝塚の調査風景



遺跡の場所



土器の出土状況



当時の海岸線と貝塚

まとめた報告書を刊行しました。

昭和60年（1985）には、埋蔵文化財センターの前身である横浜市埋蔵文化財調査委員会が、学校の南隣を調査しました。この時調査をおこなった場所は、すでに西・南隣で造成工事が進み、高さ5m以上も削平されており、幅約5mの土手状の高まりとして残っている程度でした。表層には客土が積まれ、貝層の遺存状態は決してよいものとは考えられませんでした。しかし、調査が進むにつれ、客土および旧表土の下に良好な貝層が遺存していることが確認されました。貝塚は、南から北に向かって約20度の角度で貝層が傾斜する、斜面貝塚であることがわかりました。貝層の遺存状態もよく、厚さは最大約80cmに達するところも



土手状に残った貝塚（奥が緑ヶ丘高校）



傾斜する貝層

ありました。

平成4（1992）年には、神奈川県立埋蔵文化財センターによって、高校敷地内の調査が行なわれました。この調査では、南側に設定した1か所の調査区で貝層がみつき、貝塚のおおまかな広がり確認されました。

◆今回の調査について

平成20年（2008）5月～6月にかけて、本牧緑ヶ丘の県立横浜緑ヶ丘高校敷地の南端で、約35㎡の範囲を調査しました。この位置は、平成4年に神奈川県立埋蔵文化財センターが行なった調査で、唯一貝層が確認された調査区ゆいづの南に隣接した場所です。

調査の結果、調査区の東側で、縄文時代前期の貝塚が確認されました。また、貝層の下からは貝塚ができる以前に形成された焼土遺構しょうどいこうも発見されました。

みつかった貝層は東から西へと傾斜していき、中央付近より西では貝はみられなくなります。神奈川県立埋蔵文化財センターの調査では、貝層の北端と考えられる部分が見つかっており、この付近が貝塚の北限に近い部分である可能性が高いといえます。

貝層やそれより古い土層の中からは、縄文土器や石器、



調査区の位置



貝層の範囲

動物・魚の骨などの出土品が発見され、その数は整理箱に換算して約60箱に相当します。平台貝塚でみつかった土器は、縄文時代前期後半の諸磯式と呼ばれる時期のものです。この時期の土器は、竹管状の道具を使って施文した文様が主流となっています。また、石器は、打製石斧や礫器が多くみられます。

今回の調査では、発見できませんでしたが、以前の調査



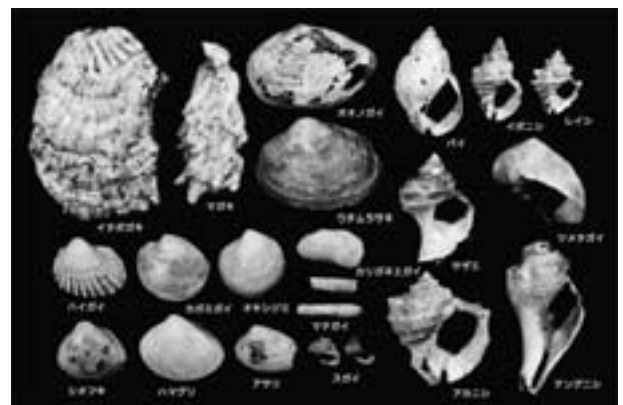
今回の調査でみつかった貝層



貝層中の土器

で貝輪や貝刃などの貝製品や、骨角器（骨やシカの角などで作った道具）などもみつかっています。

貝塚を形成している貝としては、二枚貝ではハマグリ・カガミガイ・シオフキ・アサリ・マガキ・イタボガキ・オキシジミ・マテガイ・ハイガイ・サルボウなど、巻貝ではツメタガイ・アカニシ・イボニシ・キサゴ・サザエなどがみられます。



貝塚からみつかった貝

貝層の下で発見された焼土遺構からは、炭化物が出土しました。明瞭な掘り込みは確認できませんでしたが、形成された焼土の様子から炉の跡である可能性が高いと考えられます。

平台貝塚は、東京湾に突出した「本牧岬」の、海に臨む台地上にあります。周囲からこの時期の貝塚はほとんどみつかっていません。この本牧台地付近には、鶴見川流域に比べ縄文時代前期の貝塚は少なく、貴重な遺跡といえるでしょう。

〈参考資料〉

松島義章 2006 『貝が語る縄文海進 ー南関東、+2℃の世界ー』（有隣新書）

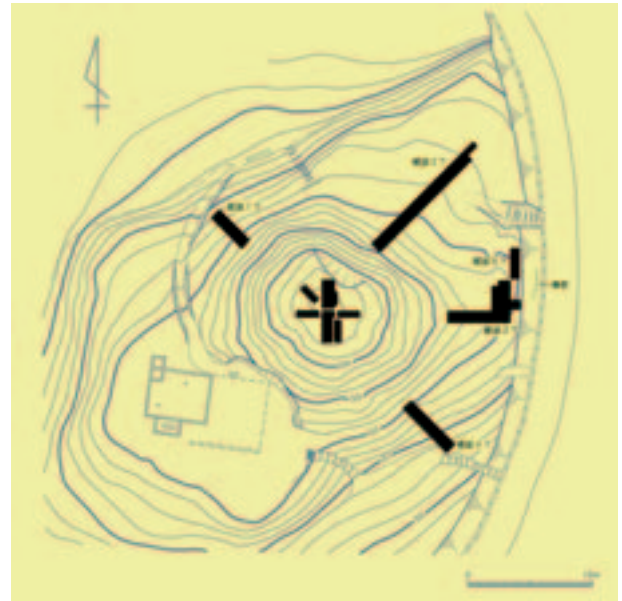


鶴見川の下流域には、多くの古墳が知られています。前期の古墳としては、日吉観音松古墳（港北区日吉）や加瀬白山古墳（川崎市）があります。いずれも全長70～90mの前方後円墳です。中期では日吉の矢上古墳やカネ塚古墳（港北区新吉田町）、後期では駒岡堂の前古墳（鶴見区駒岡）などがあります。また、12基が確認された箕輪洞谷横穴墓群（港北区箕輪町）は、古墳時代の終わり頃に造られた横穴墓群です。

これらの古墳は、大きく分けて日吉・加瀬を中心とした矢上川下流地区、駒岡・末吉などの鶴見川本流右岸地区、それよりやや上流の大菅根・師岡地区、そして早淵川最下流の地区の4つのグループがあります。ここで紹介する綱島古墳は4番目のグループに含まれます。



現在の綱島古墳



綱島古墳の地形図

東急東横線綱島駅西口を出て右手に進むと、緩やかな坂の先に雑木林に囲まれた綱島公園があります。綱島公園は昭和19年（1944）に防空緑地として開設され、高射砲陣地が置かれました。戦後、公園として再整備され現在に至っています。綱島古墳はこの綱島公園の中にあります。

綱島古墳の調査は平成元年（1989）に行われました。調査は墳頂部に6か所、墳丘裾部に5か所の試掘溝（トレンチ）を設定し、埋葬施設の有無・古墳の規模や形状および周溝の確認を目的としたものでした。その結果、墳頂部では明瞭な埋葬施設は確認できませんでしたが、粘土のほか鉄刀や刀子が発見され、ここに埋葬されていたと推定されます。一方、裾部では東側に長さ10mの低い張り出し部が確認されましたが、これも前方部とは断定できませんでした。出土品としては、トレンチ内から須恵器の甕や土師器などがあります。また、墳丘外表から復元可能な筒形（円筒）埴輪がみついています。この調査では、綱島古墳が、低い張り出し部を伴った直径約20m・高さ約3mの円墳と推定されること、出土遺物の年代から、5世紀後半～末頃に造られた古墳であることがわかりました。

埋蔵文化財センターのご案内

出土品や整理作業のようすを見学できます（予約が必要です）。埋蔵文化財や歴史に関する質問も歓迎します。

受付：午前9時～午後5時。土・日・祝日休み。

交通：東横線「綱島駅」より東急バス1番乗り場「勝田折返所」行終点。田園都市線「江田駅」より東急バス「綱島駅」行「勝田」下車。

ホームページアドレス

<http://www.rekihaku.city.yokohama.jp/maibun/index.html>

*「埋文よこはま」は、横浜地域で発掘調査された遺跡や出土した遺物を紹介する広報紙です。

埋文よこはま 19

発行日 2009年3月18日

編集・発行 財団法人 横浜市ふるさと歴史財団
埋蔵文化財センター

〒224-0034 横浜市都筑区勝田町760

TEL 045-593-2406

FAX 045-593-2403